

第120回 有田国際陶磁展
産業陶磁器部門 審査評

審査長 井戸真伸

第120回という記念すべき本展に微力ながら携わらせていただけたことに、まずは感謝申し上げます。さまざまな社会情勢により休止を余儀なくされたことがありながらも、120年を越え、長きに渡って開催されてきたことの背景には、陶磁器産地としての誇りや使命のもと、ひとえに「やきもの」に関わってこられてきた多くの人々の努力の賜物だと思います。これだけの回を重ねてきたコンペティションは他に類を見ないですし、「継続」という力は時代がどれだけ変化しても不変ですから、150回200回と続いていくことを祈願しています。

さて、本展での賞の決定にあたって、3人の審査員のそれぞれの視点で、まずは投票からスタートさせました。その中から経済産業大臣賞に選ばれた「mono-P(モノポーセリン)」は、当初は必ずしも最多票を得ていた作品ではありませんでしたが、議論を重ねていく中で、再度作品を深く観察してみると、多くの発見に改めて感心し、最終的に選ばれたものです。例えば陶磁器は焼きやすい向き、即ち変形しにくい向きで焼成を行うのが常ですが、本作は施釉の状態から察するに、細かい方を下に向けて焼成をしていると思われ、また、インナー側にスリットを設けて透光性を上げるため、型や成型方法に工夫がなされていると分かります。一見気づかない多くの工夫が、「神は細部に宿る」ことを創り上げていると感じ、最高賞にふさわしいと意見が一致いたしました。また、製作した香蘭社さんの「らしさ」も、技術、デザイン共に光っていたと思います。陶磁器による照明器具は数多くありますが、新たなあかりのかたちをつくってくれるプロダクトとして、世界に発信して行かれることを期待しています。

経済産業大臣賞を競ったもう一点の作品が「掌(タナゴコロ)」と題されたいっちゃん技法による湯飲みサイズのカップです。精緻と称するに相応しい微細なデザインが視覚的にも触覚的にも心地よく、手に取って撫でて愛でたくなる作品です。蕎麦猪口にしたり、湯飲みにしたり、アイテムを限定させずにユーザーの自由な視点で使えるようなサイズと形状も良かったと思います。本作品を佐賀県知事賞とさせていただき、以下、全19の賞を限られた時間一杯を使って議論を重ね、決定させていただきました。

最後にわたくし事で恐縮ですが、有田を訪れたのは実に20数年ぶりです。その間、時代は変化し、いまやあらゆることにAIやデジタル技術が使われ、人々の関心の多くもモノからコトへと変遷してきました。そういった時代変化の中にあっても20数年ぶりに訪れた有田は、普遍的な良さをきちんと理解し、守ってきたことを強く感じます。これからもその伝統を絶やすことなく、変化し続ける社会において、産地の使命とは何なのか、陶磁器とは何なのか、常に問い続けながらこれからも発展されていくことを願っています。

審査員名簿
産業陶磁器部門

(50音順・敬称略)

氏 名	所 属	備 考
イド マサノブ 井戸 真伸	愛知教育大学教育学部 美術教育講座 教授	東京都生まれ。 2009年よりヘルシンキ芸術デザイン大学客員教授、アラビア・アートデパートメント客員アーティストを務め、両ポストを行き来しながら、「人」「生活」「デザイン」についての関わりと研究を深める。 近年はデザイン、アート、エンジニアリングなど、カテゴライズされた概念に捕らわれない創造的活動を、特にこれらがまじり合った曖昧な箇所注目しながら渡る試みに奮闘している。 国内外にて作品展示、収蔵、受賞多数。 2021年Center of Contemporary Artists(Italy)世界Top10に選出。
オオタニ ヒロハル 大谷 弘治	損害保険ジャパン株式会社	京都府出身。 1988年同志社大学法学部卒業。 同年に安田火災海上保険株式会社(現損保ホールディングス損保ジャパン)に入社。 長年、損害査定や鑑定などを経験。 2021年から、さくらミュージアム財団理事。
マツオ キコ 松尾 綺子	佐賀新聞社 メディア局コンテンツ部記者	佐賀県出身。 東京女子大学進学を機に翻訳の仕事始める。 2022ミス・インターナショナル日本代表選出大会で日本一。 日本代表として出場した世界大会でアジア1位。 現在、通訳やモデルなどとして国内外で活動中。 有田文化交流大使を務める。